

私は本書執筆で友を喪う覚悟を決めた
——政治学者の著者が問う「野党の罪」

なぜリベラルは 負け続けるのか

専修大学教授 岡田憲治

定価：本体 1,600 円＋税 体裁：四六判ソフトカバー 256p

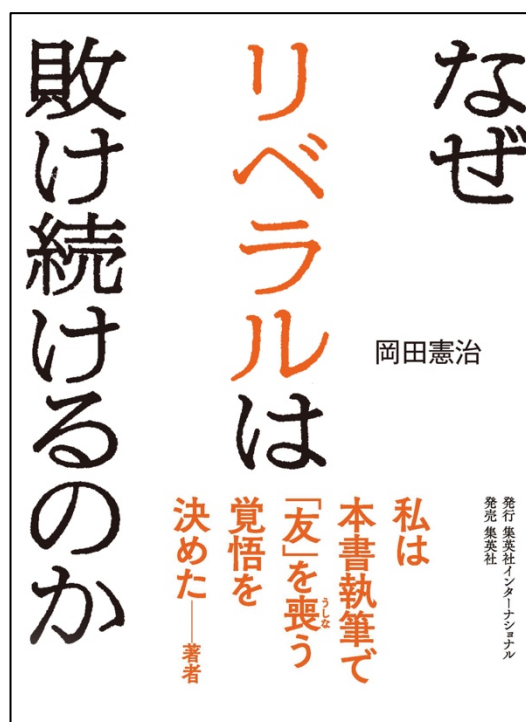
発行：集英社インターナショナル 発売：集英社

ISBN：978-4-7976-7373-9

2019年5月24日（金）発売

今夏の参議院選を前に
緊急出版！

「安倍一強」を許したのは、他ならぬ野党だ！！
内輪もめに明け暮れ、大同
団結できない、リベラル
陣営の実態を容赦なく
追及し、日本型民主主義
の弱点を鋭くえぐる一冊。



<著者からのメッセージ>

私はこれまで本を書くことで、たくさんの人たちと友人になることができました。

思いを共有できるとは、本当にうれしいことです。「思っていたことを代弁してくれた」と言われれば、物書き冥利に尽きるというものです。



しかし、今回は、ひょっとすると、これまで友人だと思っていた人たちから「さよなら」をされるかもしれません。「よく言ってくれた」ではなく、「そんな人だと思わなかった」という言葉が返ってくるかもしれません。

でも私はこの本を書きました。見たいものだけを見て安心し、もう決めてしまったことを再確認することを続けていても、これ以上に友人を増やすこともできませんし、それでは世界は変わらないと思ったからです。

友を失い、そしてまた新しき友を得るための「安心しにくい」答えと、それを導くきっかけを、身もだえしながらこれから示そうと思います。（「はしがき」を再編集）

<本書の目次より>

プロローグ オトナになれない私たち

第一章 なぜリベラルは「友だち」が増やせないのか

第二章 善悪二分法からは「政治」は生まれない

第三章 なぜ「支持政党なし」ではダメなのか

第四章 「議論のための議論」から卒業しよう

第五章 すべての政治は失敗する

第六章 「お説教」からは何も生まれない

第七章 「ゼニカネ」の話で政治をしたい

第八章 議員には議員の仕事がある、ということ

第九章 なぜ私たちは「協力」しあえないのか

第十章 現実に立ち向かうための「リアリズム」

エピローグ 政治に「未来」はあるのか

<著者略歴>

1962年東京生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了（政治学博士）。専修大学法学部教授。専攻は現代デモクラシー論。著書に『権利としてのデモクラシー』（勁草書房）、『言葉が足りないとサルになる』、『静かに「政治」の話を続けよう』（共に亜紀書房）、『ええ、政治ですが、それが何か？』（明石書店）。インターネット・ラジオ「路地裏政治学」（ラジオデイズ）など各種メディアにて発言・寄稿。

★お問い合わせ先：株式会社集英社インターナショナル 出版部 TEL: [03-5211-2632](tel:03-5211-2632)

<https://www.shueisha-int.co.jp/>